

東京、大阪、神戸と大都会に至るにしたがつて、日に月に迷信が盛んになってきたようである。ここにいちいち例をひく暇がないが、その状態を知ってくると、滑稽というよりはむしろ悲惨である。生神様が出たり、生仏いきぼとけが出現したり、病氣平癒、商売繁昌、等々のために、愚にもつかない迷信が街の裏に表にはびこつてゆく。そしてそれは仏教の衰えてゆくのに反比例しているようである。この傾向は、広島のような仏教国にすらも著しく現われてきている。田舎もちろんご多分にもれない。世はまさに迷信狂時代である。

宗教は衰えたと言われる時に、それとは真反対に、何ゆえに迷信狂時代を出現してゆくであろうか。それはわれらに与えられた大問題でなければならぬ。私はそれについて次の諸点を考えることができると思う。

- 一。生活難
 - 二。宗教的教養の貧弱。
 - 三。国民文化の低いこと。
- その他にも多くの条件があると思うが、この三点がその主たるそのだと思ふ。

その第一の生活難のために、高遠な哲理や、崇高な理想や、人格的道義的な仏教などに頭を使うよりは、なんらの準備も教養も用いないで、ただ与えられた行の形式によつて、現世を祈る神々に走ることが、どれだけ必要だか知れないとの考えからである。「神は幸福を与える」との漠然たる信仰が民衆を駆つて、至る所に神や仏のご繁昌を来たすのである。この生活難と迷信との関係はすでに論じつくされた問題だからこれくらいにしておく。

第二の宗教的教養の貧弱は、国家的社会的大問題ではあるまいか。

国民の道義の水準はその奉ずる宗教の高さに比例すると言つてもいいと思ふ。

朝鮮民族を思う時、あの朝鮮の内部にはびこつている普天教その他の、それこそ、無智蒙昧な、お話にならぬ迷信邪教を想起せざるを得ない。真理性の少しもない、迷信に輪をかけたような神を今でも信じさせられている。そして彼らは独立する能力のない国民であつた。

東京帝大仏教青年会誌「仏教文化」五月号の冠頭に、長井真琴氏の「仏教文化運動の樹立」というのが載せてある。氏が欧米に旅行しての感想を次のごとく書いてある。

「その際痛切に感じた事は、かの紐育ニューヨークのリバーサイドチャーチなどへ行つて見ても、三十余年も費して完成したその広大な殿堂が、常の日曜のサービスでも立錐の余地もなくなるほど民衆が集まつてきて、祈祷し、讚美歌を歌い、敬虔なクリスチャンとしての行事を実行している姿を見て、米国の民衆は宗教的教養において充分明日の文化

を指導し得ると感じた。英国においても各教会は日曜ごとに会場一杯の会衆を迎えてサービスを行っている。従来の旅行者が、英米においては宗教はもはや民衆の心から捨て去られたと物語っているのを聞かされたけれども、この教育の日曜ごとに行われるサービスを見て、だれがその言葉を信ずることができよう。」

東京市などでは、仏教の講演などがあつても、普通、四五十人も集まれば盛会の方であるのと思ひ合わせて感慨なきを得ない。

私どもは映画を観てその感を深くすることであるが、西洋映画では、きわめて敬虔な場面に神の出ることはあつても、茶化するための時に宗教は出ない。ところが、日本の映画を見てみると、南無阿弥陀仏とか南無妙法蓮華経とかが出る時には、たいがい滑稽か茶化すためか、ユーモアのために爆笑嘲笑を買う場面のみ出されてくる。私はいつも嘆かわしいことだと思つている。

印度についての感想がつぎのごとく書いてある。

「アジャンタの洞窟の偉大なる遺蹟、祇園精舎や鹿野苑や仏陀伽耶の遺蹟、その他、阿育王の事蹟を物語る数々の美術品等を訪れて、私は在りし日の仏教時代を偲び、低徊去るに忍びなかつたのであるが、一步外に出て印度の民衆に接すると、自分の抱いていた仏教印度の幻は、一撃の下に打毀かれてしまふ。印度教寺院の山羊の犠牲とか、印度人の貪欲さ加減とか、その不潔極まる生活などは、かつて仏教が教えた五戒、八正道、六波羅蜜等の尊い教は全く忘れられて、現世主義で、貪欲で、嘘を言い、金銭を貪り、人の物を失敬するなどということは何とも思つていない。汽車の中でも洗面所などに何一つ備えてないし、客車なども、日本のごとく箱の中を自由に通行できるようににはしないで、六人なら六人だけしか入れないように仕切つてあり、あらゆる施設は偷盗を防ぐためにできているというありさまであり、その惨酷な犠牲なども、山羊一匹を供えれば、その二倍の利益が得られるという觀念の下に行われている。真に低級な宗教を持つ国民は、これほどまでに文化を低くするものかと頷かれた。」と。

時々、「仏教のおこつた印度を見よ。仏教のために国が滅んだではないか。」と問ひかける青年がある。

しかし印度はけつして仏教によつて滅んだのではなくて、仏教が勢を失うにしたがつて、低劣なる印度教、回教などが取つて変わったのである。そしてその現状はあの通りなのである。

日本の現状をどう見ても、仏教が栄えつつありとは思えない、そしてそれに取つて変わつてゐるものは、いったい何であるのか。

その罪の大半は、過去の仏教者たちが負わなければならぬ。寺院の説教や、その宗教的形式において、深いものを持ちながら、正しい深い教育によつて民衆を高い高めないで、いつまでも「民はよらしむべし、知らしむべからず」といつたふうの低級

な説教でゴマ化しておいたがため、知識階級と青年男女とをして、寺院とは、葬式をする人のいる所、お浄土とは死んだ先のこと、他力とは何もしないこと、寺院には、老人しか集まらない所といったふうな感じを一般に持たせてしまったのである。しかも真の仏教はそれらの真反対である。

それとともに、その大半は明治時代教育の弊害である。だから見よ、最高学府の教育を受けた人たちにして、仏教者であつたら老婆すら信じないような迷信を平気で信じていつつ、仏教については全然知らないくせに、仏教を怒罵し、宗教を冷評しつつ自らは、方角博士、日柄博士のご厄介になつている。

第三、国民文化の低級。

人間は少し非常時めくと、すぐその正体を暴露するものである。かつて大正七八年ごろ、黄金の洪水が日本の岸におしよせた時、いわゆる成金たちは、牛乳の風呂に入つたり、百円札に火をつけて手燭のかわりにしたり、濫費豪遊、醜態愚劣の極致を發揮した。そしてその裏が今日来ると、内面生活の空虚を赤裸々に表して、エロ、グロの刹那主義、享楽主義の全盛となり、迷信狂時代を出現し、御神火イズムにたたられ、素朴的な唯物思想に害せられ、真面目に人生を考えず、苦悩を克服して逆境にうんと力を培い、天然の試練に打勝つて民族の使命を果たそうとはしない。しよせん世界のいずれの国に行こうと、苦しい時なのである。ただよくこの逆境に真の伝統の力を發揮し、新しき理想にむかつて歩みきる者が、やがての世界の指導的位置におかれるのである。順境にも学び、逆境にも学び、驕らず、悲観せず、自暴自棄に陥らず、いよいよ確乎たる信念によつて無我の生活に終始すべきである。

科学すら真に教えられなかつた国民、その精神教育だつて、無内容な熱のない教育ではなかつたのか。知的教育すらもつと徹底していたら、かかる迷信狂時代は来なかつたであろう。ましてもつとその精神教育が画一主義を出で、宗教的色彩を持ち、師範教育そのものの方向を変えていたら、これほどまでに墮落した社会はできなかつたかも知れない。

しかし、日本の宗教的文化が低かろうと高かろうと、日本はわれわれのものである以上、悲観していることは許されない。コツコツと仏教の示す理想を掲げて歩まなくてはならない。人は一度に二つの仕事はできない。恵まれた短い生命を打込んで時代と時代とをつなぐ現在に一つの小さい文化の火として燃えてゆけばいい。私の一生はただ、仏教について、ほんの一言を知るだけで終るかも知れない。それでも満足である。

仏教では正しく教を説く人を国師といい、正しく仏教を生活する人を国用といい、国師、国用を兼ね備えた人を国宝というそうである。考え方によつては、三つとも揃つていようし、考え方によつては、国師すらないとも言えよう。尊い国師が現われ

てくるためには、国民の歩みがそれを求めねばならないし、多くの国用が国土を莊嚴するためには、りっぱな国師が必要である。

私は長い間沈滞していた仏教界に、幾多の真面目な国師の現われかけているのを拝んで、感謝するものである。

われらは純真に国師の導きによって、文化創造の礎石となりたいものである。